

古川勇気著

『チーズづくりの民族誌
——ペルー山村の暮らしと市場を
つなぐ「計算」と「配慮」——』

大学教育出版 2020年 xiv + 248ページ

つくだ あさ み
佃 麻 美

I ペルーにおける酪農業と農民研究

本書は南米ペルー共和国の北部山地カハマルカ県の酪農業を調査対象とした民族誌である。南米における酪農業の歴史は比較的浅い。現在搾乳されているウシやヒツジ、ヤギは、植民地化以降にヨーロッパ大陸から持ち込まれたものであり、それ以前に乳利用の文化はなかった。南米で独自に家畜化されたラクダ科のリャマやアルパカは搾乳されないからである。著者によると、カハマルカ県の酪農業の歴史はここ100年のもので、乳製品の消費者はスペイン人の大土地農園(hacienda)領主だったが、1930年代には、多くのスペイン人が住むリマにも商品が出荷されるようになった。現代のラテンアメリカにおいて乳利用は無視できず、酪農は同地域に根付いた生業である、という。なかでもカハマルカ県は、ペルーにおいて、ウシの保有数では2番目に多く(2015年)、牛乳の出荷量では第1位(2015年)と、ペルー国内有数の酪農地帯の1つである。

著者は、本書をラテンアメリカ農民研究の1つとして位置づけている。そして先行研究にはない特徴として、酪農業は農業よりも、よりコンスタントに市場経済と関わりをもつ生業であることを挙げる。というのも、農業は収穫(つまり販売する機会)が年1、2回なのに対し、酪農業の場合はほぼ1年中搾乳が可能で、その生乳の大半はマーケットに販売され、貨幣経済と強いつながりをもつからである。アンデス人類学では、とくに1980年代までの民族誌研究では、アンデス村落を閉鎖的で非貨幣経済に

よる自給自足システムに基づく共同体として描き出す傾向にあり、市場経済との関わりは消極的であるとされてきた。1980年代以降、各地の農村へ市場経済が浸透したという社会変化を背景に、農民の経済行動を説明する視点は方法論の見直しを迫られていると指摘し、本書も都市や国内市場との関わりにおいて経済実践を論じる研究動向を受け継ぐものであるとする。

また経済人類学の議論においては、実体主義・形式主義論争があるが、排他的な二項対立の一方のみが成り立つという前提に限界があったと指摘する。近年の研究では両経済は重なり合う状況が存在するといわれており、本書の調査対象であるチーズ生産者もまさにこれに当てはまる。調査地の人々は、経済での利益追求を目指す領域と村のなかでの社会関係を重視する領域の両方を生きており、市場経済の利益追求=「計算」と、社会関係の維持=「配慮」の両方が必要になる。本書の目的は、かれらがどのように市場経済と山村の社会関係との双方に結び付いているのかを、経済人類学的視点から民族誌的に描くことであるとされる。

II 本書の概要

本書は「はじめに」と「あとがき」に挟まれて8つの章で構成されている。第1章は先行研究の検討で、続く章は、部として2章ずつまとめられている。第I部「カハマルカ県酪農業の概要と乳製品を販売する農民の生活」は調査地の概要、第II部「村内における市場経済の影響と農民の振る舞い」は村内について、第III部「都市の動向と村外に向けた選択」は村外について描いており、第8章は全体のまとめである。以下、第2章以降を簡潔に紹介する。

第2章「カハマルカ県酪農業とチーズ流通網」では、カハマルカ県の本格的な酪農業の開始は国際食品会社ネスレの子会社の誘致から始まること、また農地改革以降の耕作地の細分化によって北海岸都市や首都リマへの農民の移動・移住が活発化し、そこで形成された親族・同郷ネットワークが、カハマルカチーズを扱う仲買人の販路における基盤の1つであると考えられることなどが説明される。著者はチーズの流通網を3つに分類しており、近代的な工場で大量生産されるチーズを取り扱う「大会社によ

る流通網」以外の2つの流通網、「フレッシュチーズ流通網」と「マンテコッソチーズ流通網」が本書で取り扱われる。前者では、個人経営のチーズ生産者が作ったフレッシュチーズとティポ・スイソ（円熟チーズ）を、仲買人が生産地で買い付け、リマなどの北海岸都市のチーズ定期市場で販売する。後者では山村の定期市場でケシーリョという生チーズ（生乳を温めて、35～38℃にした後に、粉末状やタブレット状の凝乳酵素を加えて、ビニール袋やザルに入れて固めただけのもの）が買い付けられ、それが都市部のチーズ生産者によってカハマルカ県の特産品であるマンテコッソチーズに加工されて各地の注文先に発送される。

第3章「チーズ生産者の消費と社会関係づくり」では、ある家族の食生活を参照しながら、チーズ生産者が市場経済、すなわち現金収入に大きく依存していることが示される。一方で、村内でのさまざまな社会関係の維持・強化を行う実践ややりとりも持続しており、農業における労働交換のほかにも、生乳を自分に売ってくれる農民にバターのお裾分けをしたり、家畜の餌のためにホエーを配ったりする。また生乳代金の前貸しや、商店を経営しているチーズ生産者が農民にツケで商品を提供することもある（ただしあくまで農民の生乳代金で支払える金額内に抑えている）。これらは年に数回しかない農業の労働交換よりもはるかに恒常的な交換活動であり、近隣農民からはチーズ生産者による贈与や提供と見なされることで、生乳提供が促される場合もある。

第4章「農村における市場経済の影響と農民の特異な経験」では、農民たちのあいだで生チーズ（ケシーリョ）を売るか、生乳を売るか、あるいは専門的にチーズを生産販売するのかという選択の違いが、どのような要因から生まれるのかが分析される。物理的な距離による労働の負担と効率性、世帯の労働力、都市との関係、そしてかれらの人生経験も参照点の1つとしながら、農民はどの選択肢をとるか判断している。市場経済に周辺的にのみ参入するという先行研究が示してきた農民像とは異なり、市場経済に積極的に参入する農民の姿が描かれる。

第5章「村内での利益追求と協調意識——社会／市場の重なり——」では、ラテンアメリカの農民研究で議論されてきた「富の平準化」のイデオロギーと、それと一見相反する市場での利益追求の実践が、

いかに両立しているかが描かれる。チーズ生産者は比較的収入が多く、また近隣農民もそれを察しているため、周りから「富の再分配」を期待されており、第3章で示したようにバターやホエーの贈与や、前借し、ツケによって自らの気前の良さを示す。それだけでなく、カルナバル（carnaval、英語読みではカーニバル）の祭りの運営を引き受け、労力をはらう。しかし実は、祭りの資金は外部機関からの出資金でまかなったため自身の出費はなく、むしろ祭りでビールを販売することで利益まで得ていた。このように、これまでは村外のものとして描かれてきた資本主義が村内にも入り込んでおり、さらに従来の「気前のよさ」のイメージを表向きは維持しながらも、裏では着実な利益をねらう損得計算が行なっている。

第6章「ケシーリョ市場の取引関係——農民と仲買人——」では、チーズ市場における農民と仲買人の価格交渉に着目する。取引関係に関する先行研究では、情報の不確実性が見られる市場では情報探索コストを削減するために固定的な取引関係が志向されるが、同時に固定的な顧客関係の形成はリスクや制限を伴う場合があることも指摘されている。一方、本章で取り上げる「ケシーリョ市場」では固定的な関係と一回的な関係とのあいだで移行が見られ、さらに一方向の移行だけではなく元の関係に戻ることもあるという。「信頼」すなわち固定的な関係を重視する農民であっても、その時々のお買い物の予算に応じて一回的な取引を行うことがあり、仲買人は、ケシーリョがこの市場でしか手に入らない特産品であるという事情から、農民の取引変更をとがめることはない。農民は「主体的に」市場経済に参入していると結論する。

第7章「農村開発とチーズ生産者の選択——農民と開発支援者——」では、農民が開発支援者の指導内容をどのようにに取捨選択するかについて検討される。開発支援者である国内 NGO は、農民世帯の収入を増やすことを目的として、チーズの品質向上のため技術供与を実施している。本章では低温殺菌処理技術を供与するプログラムから途中離脱した農民1人と最後までプログラムを終えた2人の事例が検討される。前者は、チーズ製造所の改築という大きな金銭的、時間的な投資が必要となる直前に離脱し、既存の生活リズムを優先したという。後者は、低温

殺菌チーズを作れるようになったが、労働コストなどを考慮した結果、最終的にはそれを作らなくなった。開発支援者は、外部市場に対する収支計算を行ってプログラムを実施しているが、参加者はその計算には含まれない労働コストや社会的要因まで考慮している。その上で後者の2人は、プログラムの過程で身につけた技術を使い、生産するチーズをフレッシュチーズからティポ・スイソに変えることで、収入を増やした。これは開発支援者の期待とは異なる結果だが、プログラム終了後の実践は参加者の主体性に任せるといふ開発の「余白」が、参加者に取捨選択する余地を与えることになり、参加者は生活リズムの維持と一定以上の収入拡大を両立させることが可能になったと分析する。

第8章「農民の計算と配慮の実践」では、総合的な検討が行われる。本書で取り上げる農民は、周囲に配慮する「調和的な」社会的な振る舞いの高評価さえも、市場原理に基づく収支計算に転換する「狡猾さ」をもつという、生きるためには理にかなった生活の術を経験的に身につけており、これこそが今日的なラテンアメリカ農民像であるという。そして、村内での文化的配慮と市場経済の利益のどちらを欠いても生活が成り立たない状況において、「試行錯誤して稼ぐ」という生来的なたくましさを描いてきた本書は、「よりよく生きるため」の知恵と苦勞を描いた民族誌であるとまとめる。

III 本書の貢献と論点

アンデス村落に市場経済が浸透していく様子は、筆者が調査をしているペルー南部の村落とも共通点が多く、興味深い。貨幣経済が浸透した現代において、村内の社会関係と外部の市場というふうにはっきりと切り分けることはできないという点には大いに賛同する。村内の富の平準化についての事例では、チーズ生産者と生乳を売る農民では、情報の非対称性（チーズ生産者は、農民に生乳代金を支払うことから、かれらの大体の収入を把握しているが、農民の方は、自分たちよりも収入が多いというイメージはあっても、具体的にはわかっていない）から、生乳代金の前払いや商店でのツケなどによってチーズ生産者側が「気前の良さ」を見せているようで、実はチーズ生産者側が決して損をしない、すなわち利

益追求に有利なやりとりになっているなど、興味深いところも多かった。その上で、いくつかの疑問点と論点を提示したい。

本書は、タイトルにもあるとおり、「民族誌」であり、各章でも「民族誌的に記述する」ことが繰り返され強調される。であるならば、事例やデータの説得力が重要であると筆者は考えるが、いくつかの事例では疑問が残った。たとえば、第7章で示された開発プログラム参加者のプログラム前後の収入についてである。最後までプログラムを終えた2人の収入は大幅に上がったと説明し、1人は生乳回収のためのバイクを購入したというのだが、そのためにウマを売ったとしているし、もう1人は雌ウシを購入したというが、そのために雄ウシを1頭売り、足りない分をタンス貯金からまかなったと述べている。この記述を読む限り、彼らが「豊かになった」ことは、すでに持っていた家畜を売却したり貯金を切り崩したりしたことによるものであり、プログラムと関連性はないように見える。さらに家計状況として示された収入は、プログラム参加後に確かに増えているのだが、データをとったのが乾季と雨季という違いがある上に、プログラムを途中離脱した1人の収入も増えている。これについては雨季で搾乳量が増えたためであり、プログラムに途中まで参加したことを直接反映するものではないというが、雨季で搾乳量が増えるというのはほかの2人にも当てはまる。雌ウシを購入した人は、所有するウシの頭数が増えたことも搾乳量を増やす要因となるだろう。時期や状況を揃えたデータをとるのが難しいことは同じくフィールドワークをしている身としてよくわかるのだが、開発プログラムに参加したことによる収入の増加であるというのであれば、データをより丁寧に説明する必要があるのではないかと感じた。

また著者は、先行研究では市場経済の領域が外部のものとして位置づけられていることを批判して、本書の調査対象の特徴の1つとして、貨幣に媒介された市場経済の領域と、互酬性を伴う社会の領域が、重なり合っていることを挙げている。この視点に立ったとき、仲買人は村外のもの、すなわち外部アクターとして扱われているが、それでいいのだろうかという疑問が湧いてくる。第2章の概要で、農民の都市への移住がチーズを扱う仲買人の販路と関連していることが説明されているし、事例でも仲買人

をしているごく近い親族が出てくる。ということは、現在はチーズ生産者や農民であっても、仲買人になることもあり得るわけである。その点を考慮すれば、市場経済と社会の領域の重なり合いをより複雑で厚みのあるものとして描けるのではないだろうか。また第6章でチーズを仲買人に売る際、信頼のある固定的な関係から一回的な関係に移行することは、農民にとって、再び元の取引に戻れるかわからない、不確実なリスクをはらんでいることが述べられている。これが単に「馴染み」の仲買人というだけならば、たとえ元の取引関係に戻れなかったとしても（気まずさはあるだろうが）、探索コストはかかるが新たな信頼できる仲買人を探せばいい。しかし、仲買人が近い親族である場合、取引で関係を損ねることは、それ以外の社会関係にも将来にわたって影響を及ぼすだろう。第7章では、実際に仲買人の妹から市街地のチーズ会社に売却先を変えたという事例が紹介されているが、関係は破綻しなかったのだろうか。そこで関係を維持するための実践があったのであれば、ぜひ書いて欲しかったと思う。

最後に、著者が現代的なラテンアメリカ農民像として描くものについてである。著者は、世帯経済の領域での維持拡大を目指すだけでなく、人によっては市場経済の領域に積極的に参入して利益追求を行うという野心的な農民像を描いている。世帯経済とは、グードマンとリベラが提示する「家モデル」(house model) という概念における、現地農民が家にかかわるあらゆる基盤 (base) を維持拡大させるための経済であると説明される。しかし、利益追求を行う農民であっても、村での生活を完全に捨て

られるわけではないと著者は書いている。「どんなに市場経済の影響によって村が開かれようとも、彼らの「居場所」は村の中の土地や家畜にある。(中略) 彼らは都市に出て行ってもそこに居場所はなく、結局村の中の土地に居場所を見だし、定期的に村に戻って来ては、不便だと思われる生活を営むのである」(119 ページ)。これは、市場経済に積極的に参入している農民であっても、最終的に目指すべきものは村の土地や家畜の充実であり、まさに世帯経済の領域で維持拡大を目指しているということなのではないだろうか。「世帯消費を満たす」だけではないとはいいつつ、それ以上の何か、たとえば市街地にホテルなどの不動産を購入したり起業をしたりなどといったことを目指しているとは、少なくとも書かれておらず、せいぜい余裕がある世帯消費でしかないように見える。そう考えると、一見新しい農民像が立ち現れているように見えて、実は根本のところでは変わっていないともいえるのではないだろうか。

いくつか疑問点を提示したが、とはいえ、本書は従来注目されてこなかったペルー北部の酪農に焦点を当てた貴重な民族誌である。農村開発の経緯と参加者のその後まで追っている点は、ペルーに限らず同様の開発プログラムがいかにあるべきかを考える上でも有益であろう。今後、チーズというグローバルイゼーションのなかの食が、いかに一地域に受け入れられまた発展していくのか、そのダイナミクスがより解明されることを期待する。

(同志社女子大学研究支援員)